

令和5年度学校自己評価システムシート (県立児玉高等学校)

n06

目指す学校像	まちの創生を担い、未来の地域産業を支え、学ぶ意欲と社会性を身に付けた心豊かな人材を育てる学校
--------	--

重点目標	1 基礎的・基本的な知識及び技能の習得 2 積極的に地域と協働する学校づくり 3 実学としての資格取得の推進と100%の進路実現 4 非認知能力を伸ばし、地域社会に貢献できる生徒の育成
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

※学校関係者評価実施日は、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	5名
	生徒	2名
	事務局(教職員)	11名

学 校 自 己 評 価						
年 度 目 標				年 度 評 価 (2 月 1 日 現 在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度
1	「確かな学力の育成」は、本校にとって重要課題であり、生徒が主体的に自らの学びに取り組めるよう、日々授業改善に取り組む必要がある。その一環として、ICTの効果的な活用を更に研究していく必要がある。	「確かな学力の育成」に向けた効果的な学習指導	(1)タブレット端末を活用し朝学習の時間を充実させる(1年) (2)BYOD環境を活用した授業を行い、生徒が主体的に学びに取り組む機会を増やす。 (3)個別学習や成績不振者に対する指導を充実させる。	(1)タブレット端末の活用ができたか。 (2)生徒がGoogle ClassroomやGoogle Form、動画等を授業中及び課題等で活用できたか。 (3)成績不振者の割合が減少したか。	(1)朝学習や総合的探究の時間を中心に活用できた。 (2)担任や教科担当からの連絡、課題のやり取りに活用できた。 (3)前年度1・2学期の欠点保有者は17.6%・22.0%、今年度は31.9%・30.6%と急増している。	B
2	今年度から「地域課題解決のための地域コンソーシアム」を設置し、地域との連携・協働を推進する。また、総合的な探究の時間の学習内容を「こだま学」と位置づけ、生徒が一層地域との協働に取り組める仕組みを作る。	(1) 地域との協働の推進	(1)探究活動計画の充実を図りつつ、実現可能な活動から積極的に取り入れていく。 (2)積極的に行政や自治会と協働していく。	(1)地域との協働を通じて「こだま学」としての探究活動を実現することができたか。 (2)市民ポブラサロン等の協働を継続できたか。	(1)想定していた「こだま学」の活動は概ね実現できた。 (2)ポブラサロンのみならず、「こだま学」や各学科での地域協働の機会は非常に多く、生徒の精神的・情緒的成長に寄与している。	A
		(2) 積極的な新校の魅力の発信	各種説明会や体験行事、異校種間交流等を充実させる。	生徒募集につなげることができたか。	10月段階では昨年度より高い倍率となっている。	B
3	県内唯一の専門学科と普通科を併設する高等学校として、社会で通用する産業人の育成につながる資格取得の推進に積極的に取り組んでいく。 また、例年の就職内定率100%の達成継続に加え、上級学校への進学についてもきめ細かな進路指導のもと、教職員一丸となって取り組む必要がある。	(1) 資格取得のための取組の充実	(1)各種資格取得のための補習や講演、外部指導者の招聘を強く推進する。 (2)普通科の生徒の資格取得増加の効果的な方策を見出す。	(1)昨年度よりも検定や資格の取得率が上昇したか。 (2)普通科生徒の資格取得率が伸びたか。	各専門科では検定合格や資格取得に熱心に取組み実績を上げたが、普通科での資格取得率は伸びなかった。 面接指導や体験入学等を充実させ学校斡旋による100%の進路実現を達成した。	A
		(2) 進路希望の100%実現	各種ガイダンス、インターシップやオープンキャンパスへの積極的な参加を通じ、進路実現への意識向上を図る。	進路実現100%を達成できたか。		A
4	卒業と同時に成人年齢を迎え社会へ巣立っていく生徒たちには、様々な非認知能力の獲得が不可欠であるが、現状としては多くの課題を抱えた生徒が多い。外部支援も積極的に活用しつつ社会貢献できる生徒の育成を目指す。	(1) 学校生活の充実と規範意識の向上	(1)遅刻指導や整容指導により社会人としてのマナーを醸成する。 (2)日々の教育活動の中で集団生活を意識させ、様々な非言語能力の向上につなげる。	(1)前年と比較して指導対象者の割合が減ったか。 (2)責任感や周囲を思いやる心の醸成が図れたか。	(1)前年度12月時点で29件の生徒指導があったが、今年度は同時期18件と減少した。 (2)問題行動には他人の立場に立ってないことを原因としたものや、人間関係上のトラブルが多く、なかなか効果が見えづらい。	B
		(2) 外部支援の十分な活用	スクールカウンセラーをはじめ特別支援や日本語支援等の外部支援と協力し、個々の能力に合わせた支援に取り組む。	ニーズに合わせた支援が行き届き、生徒の非言語能力の向上が図れたか。	多くの外部支援の活用で学校生活・家庭生活が改善しつつある生徒は多い。	A

学 校 関 係 者 評 価	
実施日	令和6年3月13日
学校関係者からの意見・要望・評価等	
<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の育成(学び直し)でのICT機器の活用はぜひ継続してもらいたいし、普段の授業でも活用機会を一層増やす工夫が必要。 ・進路意識を高め早めに目標を持たせる工夫をすれば、欠点保有者数の減少につながるかもしれない。要検討事項。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・多くの有意義な活動をしてきていると思う。そういった活動を効果的にPRにつなげる工夫が必要である。良い取組みが多いのにもっといいと感じる。 ・「こだま学」の理念の一つに「地域に根付く」という考えもあり、非常にありがたいことだと思っている。今後とも可能な限り生徒の活動に協力していきたい。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・資格取得のための活動は専門科を持つ学校として非常に大事なこと。並行して「こだま学」の目標が達成に近づけば若い力が地元を盛り上げることにつながり、それがまた地元企業の活性化の原動力となり、学校・生徒にとっての好循環サイクルができる。 ・早いうちからの進路意識の醸成の工夫も必要。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・統合初年度であり、統合方法も県内唯一の特殊な統合方法である。生徒はもちろん教職員の戸惑いは推して知るべしである。特に生徒指導の分野においては「今までの流れ」も軽視できず困難さも多くあると思われる。教職員の相談・協力体制の強化と粘り強い指導の継続をお願いしたい。 	